

わが校の進学状況

福島県立福島北高等学校教諭

大野紀夫

一 テーマ設定の理由

く躍進した。

進学について論じる時、まず問題に

されるのは、国公立大への合格者数で

あり、進学率の高低で価値づけられる

のが現状である。このような社会風潮

には、もちろん批判はあり、私個人の

考え方からも賛成しがたいが、あえてこ

れを前面に立てて本校の進学問題を考

えてみようとした。

また、国公立大の合格者数を伸ばそ

うというが、本校の進学指導上の最

重点目標でもあるので、この問題にだ

け焦点を絞ってみた。

二 本校における過去五か年の進学状況について

そこでまず、最近五年間の進学状況

をみると、資料の通りである。

五十一年度は、本校が四十九年に飯坂

高校から福島北高校に校名変更して最

初の卒業生が出た年であり、国公立合

格二名は五年ぶりの合格者であった。

五十一年度になって福島北高で入学し

た生徒が卒業ということになり、進学

面でもようやく国公立大合格への道が大

きく開けたかにみえた。五十二年度で

その内訳は、推薦入学や夜間への合格

であった。

そして、五十三年度に至って一躍國立大十、公立大三と計十三名の合格を

み、今年三月、五十四年度には国公立十五、公立二と合わせて十七名に大き

うことになる。

また大学別に見ると、五十四年度の

現役合格者の高校入試得点を勘案して

も、百九十点の得点者であれば、福大

教育学部には可能性があるといえそう

である。また、比較的受験生の多い、

五十三年、五十四年の兩年度あわせて

考察すると、最低百七十五点で合格し

ているが、これはサンプルも少いので

早急には診断しがたい。

(一) 現浪の比較
五十四年度の合格数の現役、浪人の割り合いは現役四に対して浪人十三である。ところが五十三年度では国公立大十名中、現役七、浪人三、公立大現役三、浪人ゼロの割り合いであった。

また五十四年度浪人十三名、二浪一名だけで、十二名は五十三年度卒であった。したがって、五十三年度卒業生の国公立大合格数は、両年合わせて二十二名。そのうち、二大学合格者が一名いたので実数は二十一名となるわけである。この数字は本校にとってまさしく画期的といわざるをえない重みを持つものである。

更にこの五十三年度卒の国公立大合格者に焦点を絞って考えてみる。幸い私はこの学年の担任の一人として参画していたのでその面からの考察をも加味して述べてみたい。

五十三年度卒国公立大合格者の分析
(一) 高校入試成績による考察
五十三年度卒国公立大合格者の分

都留文科大合格のUの場合、高校入試百八十三点、七十四番であり上位ではなかつたが、在学中の成績は抜群で評定平均値四・六、共通一次も五十三年度六百五十八点取りながら福大教育を失敗。今年も共通一次七百五点も取つたにもかかわらず福大は失敗し、都留文科大に補欠で入学した。

学業成績と国公立大合格との相関関係は、平常の成績のよい者の合格率が高いという、ごく平凡な事実が判明した。評定平均値四・〇以上であること